

人声が恋しき深夜Eテレに濁点多きドイツ語を聴く

野原亜莉子

無性に人の声が聞きたくなる衝動。この作者の今月の作に、どうしても犬の耳に触ってみたくなる歌もあった。理由や方向が自分でもうまく理解できない衝動、自身の意思では制御できない心的方位。この作者は、心でコントロールできないそれらを言葉化する歌をさがしているらしい。期待したい。

通行人Aになりたい 土色のワークキャップを深めにかぶる 帖佐光浩

気分を主題にした歌として注目した。人は気分によって、目立ちたかったりその他大勢でいたかったりする。日によって気分が変わり、一日に何度も気分が変わったりもする。近代短歌史上で気分表現にこだわったのは窪田空穂だった。空穂が多作だったことと、関係があったのかも知れない、最近そんなことを思う。

ただ雨を眺めるだけの日曜日あま雲の先の青を思はず 増田満美子

空間的にも時間的にも、いま降っている雨だけを眺めている、そんな自分を表現する。近くを見ながら遠くを思ったり、現在を眼前にしながら過去や未来を思うのではない。「今」そして「ここ」だけ、の新しさ。

軽やかな攪拌音に耳を立て小犬四匹キッチンへ向く 東美和子

他の歌を見ると、玉葱をカッターで細かく刻んでいる場面らしい。聞き慣れない突然の音に「えっ！」という

短歌の現在

No.484

今月の13首を読む

佐佐木幸綱

感じて四匹並んで、文字通り耳をピンと立っている場面。なかなかの映像喚起力と思った。下旬の「へ」（「に」でなく）の働きで生き生きとした映像になった。

三馬力のミニ耕運機馬三頭いると思えば豊かなりけり 尾上 宏

専業農家からみれば、耕作地も狭く、耕運機も小さいが、馬三頭と思えばなかなかのものとのユーモア。

作者が経営するペンションに、定綱をふくめた「心の花」の人たち数人と出かけて行ったことがある。北アルプスの山々をのぞむ白馬村である。私のような東京人から見れば大きな畑で、季節の野菜をたくさん作っている作者。編集部宛に、毎年、送ってもらう酒にびつたりの野沢菜漬けをみな楽しみにしている。作者のフェイスブックには、野菜畑の写真が載っていたりもする。

遙かよりつなぎ来し命 わが猫の縞々の背に円きツギアテ 植田美紀子

縞々の体に一か所円いツギアテのような模様がある猫、モデルはそんな猫なのだろう。この毛並みがあらわれるまでに代々の猫たちにひき継がれてきた遺伝子を想起する、というのだ。その猫一族のDNAの連鎖をイメージすればいいのだろう。

朝風の微かなけはひ韻かせてさざ波寄せてゐる水田の面 佐々木智子

水を張ったばかりの田圃の水が、朝の風に、微妙に波立っている。水がなかった田に水が入って、それまでとはちがう気配が感じられる。「朝風の微かなけはひ韻か